

鹿児島大学の理系学生の英語学習傾向の研究 (2)

坂本 育生*

(2016年10月25日 受理)

A Study of Tendencies for Learning English for Undergraduate Students of Science at Kagoshima University (2)

SAKAMOTO IKUO

要約

前年度に引き続き鹿児島大学理学部学生の英語に対する学習傾向、意識について予備調査を行った。調査はアンケートを用いて行い、英語の得意不得意、中学校、高等学校で英語が苦手になった時期、4技能の得意不得意、TOEICに関して理系学生へ回答を求めた。英語が苦手になった時期は中学校では判明しなかったものの、高等学校では中学校と高等学校の過渡期である高校1年の時期に回答が集中した。4技能では学習機会が多い読むことが得意と答える学生が多く、話すこと、聞くことに苦手意識を感じる傾向があった。本研究は今後も引き続き継続して調査研究を行い、21世紀の大学英語教育への指針となることを強く期待している。

日本全国の大学の教養部改組から20年余りが経過し、新たなる大学英語教育の改善が求められ、大学入試においてもほとんどすべての学部において筆記試験による個別入試が実施されている現在、大学学部生の英語学習傾向を正確に把握することは極めて重要であると考えている。

キーワード：国際化、理系学生、読解力、英語文法、英語資格

* 鹿児島大学教育学部 教授

1. はじめに

国際化が叫ばれて久しく、社内で英語を使用することを推奨する企業が出てくるなど、外国語の習得は国際社会を生き抜くための手段となりつつある。周知のとおり、英語は必要不可欠なコミュニケーションツールとして役割は年々増すばかりである。理系の学生、研究者、研究系の企業で働く職員などは、学会や企業で自らの研究や自社の製品を英語で紹介しなければならず、英語力がその成功の秘訣となるのは当然であろう。

本大学では英語力に不安を抱えて入学してくる学生の傾向について明確な理由をはっきりしていなかったが、昨年度から行っている理系学生に限った調査では少しずつであるがその糸口がつかめようとしている。結論から言えば基礎力不足、すなわち語彙力、文法力、長文読解力の基礎が不十分であることなどが原因と言えるが、本大学の学生特有の傾向を探る必要もある。

文法力に関しても日本人は不安を抱えていることが多い。過去に筆者が行ったアンケート調査でも文法力に不安を抱え、大学でしっかり学び直したいという意見は多く、昨年、今年の理系学部へのアンケート調査でもその傾向が表れている。これは中学校、高等学校を通して文法学習がうまくいかなかった状況があると思われる。ベネッセ教育総合研究所(2014)や近畿大学工学部による聞き取り調査(2003)などでも英語学習がうまくいかなかったのは中学、高校時代という意見が多く、授業時間数、教員の確保など、現場での教育が難しいことを物語っている。今後英語は2020年度より小学校で正課として始まる見通しであり、今までの中学、高等学校、大学という流れの中で生じる問題とは異なったものが出てくるであろう。

英語学習の際に重視されるものも今までのコミュニケーション寄りの内容からより統括的なものになりつつある。今後は読むこと、書くこと、話すこと、聞くことの4技能をすべて統合した学習が求められるようになり、それに対応した英語教育法の確立が急務と言える。

英語資格習得の重要性に関してはもはや説明の必要はないだろう。英語検定をはじめ、1979年より始まったTOEICテストは最初こそは3000人程度であったがその数を徐々に増やし、今では年間約200万人以上の受験者を抱えるようになった。実社会でもTOEICの重要性が認識されており、履歴書の資格欄にTOEICのスコアを書くことで職種にもよるが好印象を得られるようになった。また、TOEFLも留学するための英語力を審査するために必要な試験となっている。

現在英語資格は様々な用途に応じたものとなっている。TOEIC、英検、G-TELP、やや学術的だがTOEFLなどは一般的な英語と見なすこともでき、日商ビジネス英検、工業英語などはその専門分野に特化した、より実用的なものと言える。年々英語資格に対する意識は高まっており、英語検定は大学入試に取り入れられようとしている。

本研究は前年度に引き続き理系学生に対するアンケート調査を行い、学習傾向を探るものである。アンケートを作成する際には昨年使用したものを精査し、より学生の英語学習傾向を探るのにふさわしいと思われるものを選んだ。今回の研究も昨年と同様予備実験的な位置づけであり、学生の英語に対する傾向を探るものとし、今後も継続して続けていくものである。

2. アンケートに関して

今回のアンケート調査は2015年前期、後期に行った予備調査の結果をもとに内容を見直し作成、実施した(注1)。質問要項は6題で質問数は9個である。

1. 英語の得意不得意
2. 中学校、高等学校での英語が苦手と感じた時期
3. 英語4技能での得意不得意
4. 英語学習の継続に関して
5. 文法に関して
6. TOEIC

以上の内容の質問を理系学生112人に行った。以下にその結果を示す。

(1) あなたは英語が得意ですか、それとも苦手だと思いますか？あてはまるものの番号一つをお答えください。

1. とても苦手 (36名)
2. やや苦手 (58名)
3. やや得意 (17名)
4. とても得意 (0名)

昨年行った理系学生(坂本,2015)、及び昨年度私立高等学校で行った予備調査(2016)(注2)でも英語を苦手とする学生が多数みられた。特に私立高校での調査では中学の時期よりも苦手と答える学生が増えており、英語力に不安を抱える学生は進学するたびに増えているように見える。今回の調査は医学部、歯学部など英語力に自信のある学生は調査対象になっていないので鹿児島大学の学生、もしくは全国の大学生に当てはまるわけではないが、学習のどこかの段階でつまずくところがあるように思える。

(2) 中学生の時、英語を苦手と感じた時期はありますか。あてはまるものの番号を一つお答えください。

1. 中学1年の前半 (19名)
2. 中学1年の後半 (12名)
3. 中学2年の前半 (14名)
4. 中学2年の後半 (10名)
5. 中学3年の前半 (15名)
6. 中学3年の後半 (11名)
7. 特に苦手と感じる時期はなかった (31名)

ベネッセ(2014)が行った調査では2年生の時期に英語を苦手と答える学生が多いとあったが、今回の調査では鹿児島大学の学生が中学生の時期に苦手と感じた期間を固定することはできなかった。逆に中学生の時は英語を苦手と感じなかったという回答が一番多かった。

(3) 高校生の時英語が苦手と感じた時期ありますか。あてはまるものの番号を1つお答え下さい。

1. 高校1年の前半 (33名)
2. 高校1年の後半 (9名)
3. 高校2年の前半 (16名)
4. 高校2年の後半 (18名)
5. 高校3年の前半 (10名)
6. 高校3年の後半 (14名)
7. 特に苦手と感じる時期はなかった (11名)

中学生の時と比べ、高校生の時期で英語を苦手と感じた時期はベネッセ(2014)の時と同様に高校1年生の時期に英語が苦手と答える学生が多数いるという結果となった。この時期は中学から高校に変わる過程で英語のレベル、教科書の内容、教授法の変化など様々な要因が重なる時期で、学生がその環境に慣れるのに時間がかかり、英語力に不安を多大に感じているものと思われる。

(4) 英語で得意な活動は何ですか。あてはまるものの番号を一つをお答えください。

1. 読むこと (59名) 2. 書くこと (27名) 3. 話すこと (7名) 4. 聞くこと (18名)

(5) 英語で不得意な活動は何ですか。あてはまるものの番号を一つをお答えください。

1. 読むこと (9名) 2. 書くこと (26名) 3. 話すこと (44名) 4. 聞くこと (31名)

(4) では予想通りの回答を得た。基本的に中学校、高等学校を通じて読むことを中心とした教育がなされており、学習機会が多いこの活動に回答が集中するのも当然であると思われる。また、(5) でも学習機会の少ない話すことには苦手意識のある学生の回答が多いと予想された通りになった。

(6) 大学以降も英語学習を続けたいと考えていますか。あてはまるものの番号を一つをお答えください。

1. 強く考えている (19名) 2. できれば続けたい (32名)
3. 就職に必要であれば続けたい (公務員試験、一般常識試験、教員採用試験など) (55名)
4. まったく考えていない (5名)

大学以降の英語学習に関しては去年の調査同様続ける意志のある学生が多いとの結果となった。単に英語そのものを学ぶというのではなく、就職に必要であれば学びたいという回答が得られたのは大学に入学するのは就職を意識しているからであると思われる。学習意欲という点で考えると、就職のために英語を学ぶということは大学受験の時と同様に動機づけの一つになるとと思われる。

(7) 文法の勉強をもう一度やり直したいですか。あてはまるものの番号を一つをお答えください。

1. 詳しくやり直したい (26名) 2. できればやり直したい (45名)
3. 余裕があればやり直したい (36名) 4. 特に必要ない (4名)

文法事項に関しては高等学校までの学習が不十分だと感じている学生が多いのは、今までの調査である程度判明している。今回もまた大多数の学生が大学での文法の復習を望んでいることが分かった。

(8) TOEIC を受けたことはありますか。あてはまるものの番号を一つをお答えください。

1. 何回も受けたことがある（2名）
2. 一回受けたことがある（9名）
3. 受けたことがない（100名）
4. TOEIC を知らない（1名）

(9) TOEIC を受けようと考えていますか。あてはまるものの番号を一つをお答えください。

1. 受けようとしている（30名）
2. できれば受けたいと考えている（26名）
3. 就職、進学に必要であれば受けたい（41名）
4. 受ける予定は現在のところない（14名）

TOEIC に関しては年間相当数の受験者があり、受験機会も多く、今や英語力を測る必須の試験となりつつあり、その動向は無視できないほどになっている。今回調査では受験したことのない学生が多かったが、受験を希望する回答が多かったことから、英語力測定の指標を TOEIC のスコアで測れると考えている学生が多いと思われる。今後の学生への支援体制の充実が望まれる。

3. おわりに

本研究では昨年に続き理系学生へのアンケート調査を行った。今回も予備実験的な位置づけで研究を行った。今回はある程度の数の回答者がいたこと、質問内容をより精査したことで昨年と比べ信用のある結果が得られたと思われる。ただ、理系学生に限っても英語力、英語学習傾向をつかめたとはいえ難く、今後も継続して研究を続けていかなければならない。

全体的に英語学習を続けたいという学生が大半を占めていた。特に、英語資格の習得を目指した学習をしたいという意見が多かった。英語学習は一朝一夕では成り立たないのは学習者が皆感じていることであり、また資格が重要なのは言うまでもない。その根底を支えているのはやはり英語の基礎となる文法と語彙力、基本的な読解力などである。学生がどのような学習法を求めているかはまだ判明していないが、基礎力を充実させるものが必要ではないかと思われる。

参考文献

- 相澤裕介. 統計処理に使う EXCEL2013活用法：データ分析に使える EXCEL 実践テクニック、カットシステム、2013
- 坂本育生. 鹿児島大学の理系学生の英語学習傾向の研究 (1)、鹿児島大学教育学部研究紀要、第67巻、2016
- 坂本育生. ESP 教育の研究と開発—海事英語を出発点として (II) — 鹿児島大学言語文化論集 (VERBA)、2013
- 坂本育生. ESP 教育の研究と開発—海事英語を出発点として 鹿児島大学教育学部実践研究紀要、No.22、pp.83-90、2012
- 坂本育生. 水産学部専門英語に関する基礎研究 鹿児島大学言語文化論集 (VERBA)、No.35、pp.37-48、2011
- 根岸雅史、酒井英樹他. 中高生の英語学習に関する実態調査2014、ベネッセ教育総合研究所、2014
- 本間義文. 近畿大学工学部学生の英語能力の現状—TOEIC スコアおよび語法理解の分析による適正目標設定の試み— 近畿大学工学部紀要、2003

(注)

1. 本研究は、共通教育講義でのアンケート実施に鹿児島大学教育センター高橋玄一郎教授、アンケート作成、分析などの作業に鹿児島大学教育学部英語専修修士生飯屋真悟氏との共同作業により完成した。この場を借りて感謝の意を述べる。
2. 私立高等学校で行ったアンケート調査の結果と考察は、今年度発行の鹿児島大学教育学部実践研究紀要第26巻に収録予定である。